

先日、かつて住んでいた家を片付けたとき、母が私の娘たちに買ひ与えた古い日本人形が出てきた。高価なものではないが、着物を着せ替えることのできる人形で、娘たちが幼い時によく遊んでいた。それから長い年月が過ぎ、娘たちもすっかり大人になった今、処分せざるを得なくなった。他のガラクタとなったおもちゃは、さつさとゴミ袋に詰めることができたが、この人形だけは、どうしても同じように捨てる気にはなれず、特に信仰心のない私でも、人形供養をうたっている神社に持っていくこと

子どものシンボル理解の発達

人形が、当然のことながら人の形をしているため、魂を持つているような感覚に囚われたからである。たどの物質に過ぎないと頭ではわかってはいるのだが。私の研究は、子どもの認知発達、中でもシンボル理解の発達をテーマにしている。ここでいうシンボルとは、現実のものを何らかの媒体によって再現しているもので、写真などの映像や人形も含まれる。先述したのは人形の例だが、私たちが写真に対しても特別な感情を抱くことがままある。たとえば、大切な人の写真を、ただの紙だからといって破り捨てることは容易ではない。それは、写真であれ人形であれ、シンボルは写しの元になっている存在を、視覚的に再現しているだけ

を、さまざまな実験を通して調べてきた。これまでの研究成果から、子どもは大人が思うより、ずっと大きくなるまで、シンボルを本物のように感じていることがわかってはいる。一つ実験を紹介しよう。子どもと私が順番に、逆さまに並べられた三つの紙コップのいずれかに小さなおもちゃを隠し、どの紙コップの中にもちやがあるかを当てるゲームを行った。その際、子どもが隠すときは、実験者の私自身は後ろを向いているのだが、私の写真を代わりに子どもに向けて配置した。隠し終わつた子どもに、私がおもちゃの入ったコップを当てられるかどうかを尋ねると、なんと5歳児グループでも、写真の私が見ていたから当てられると、50%近くの子が答えたのである。子どもにとって、写真は私の分身であるかのようである。

本物との区別

意外に困難

にした。

このお話しな話、おぼや珍しいことではないだろう。私のこの行動の要因は、



名城大学
教職センター准教授
木村 美奈子

でなく、何か本質的なものを分かち持つているように感じるためではないだろうか。写真技術が日本に普及し始めたころ、人々が魂を抜かれると感じたのは、今では笑い話のようだが、実際には映し出された写真に、並々ならぬ存在感を感じていたせいかもしれない。話を元に戻すと、私の研究では、幼い子どもたちがこつしたシンボルを、本物ではなく、ただの写しとして理解するようになる過程

を、さまざま実験を通して調べてきた。これまでの研究成果から、子どもは大人が思うより、ずっと大きくなるまで、シンボルを本物のように感じていることがわかってはいる。一つ実験を紹介しよう。子どもと私が順番に、逆さまに並べられた三つの紙コップのいずれかに小さなおもちゃを隠し、どの紙コップの中にもちやがあるかを当てるゲームを行った。その際、子どもが隠すときは、実験者の私自身は後ろを向いているのだが、私の写真を代わりに子どもに向けて配置した。隠し終わつた子どもに、私がおもちゃの入ったコップを当てられるかどうかを尋ねると、なんと5歳児グループでも、写真の私が見ていたから当てられると、50%近くの子が答えたのである。子どもにとって、写真は私の分身であるかのようである。

きむら・みなこ 発達心理学。
名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程修了。博士(心理学)。

